

じじいリテラシー

「うんちくじじい」対処法

《主な生態》

- ・ 仕事よりもうんちく探しに精を出す
- ・ オタク
- ・ おせっかい
- ・ 酒が入ると、やたらうんちくを言いたがる
- ・ 検定好き

出没地 / 神田の古書街

好きな映画 / ハリウッドの娯楽大作よりも人生の陰影を描いたヨーロッパ映画を好む。また、ディレク

ターズカット版が出ると、ついつい買ってしまう

愛読書 / 雑学本、ディアゴスティーニのシリーズもの、「大人の科学」、広辞苑

好物 / 四字熟語、ことわざ、検定

口癖 / 「ねえねえ、知ってる？」

殺し文句 / 「すご~い。そんなこと知りませんでした！」

ファッション / あまり知られていないレアブランド、限定ものを身につけるのが好き。でもセンスはイ

マイチ

仕事は大してできないくせに、「へ~」と感心する雑学にだけはめっぼう強いじじいです。ことわざ、四文字熟語、歴史にも詳しく、トラブルなどがあると、「飛んで火に入る夏の虫だね」と意地悪そうな笑みを浮かべながら言ったりします。

そのうちく大王っぷりには家族までもが嫌悪しているため、うちくを聞いてくれる相手を常に探しています。

収集癖もあり、これまた仕事に役立たず、妻からもっとも嫌がられるお菓子のおまけやフィギュアなどを集めていたりします。

今はやりの検定も大好きで、認定書の数ちょっとした自慢です。

モテないゆえに身につけた雑学は、いまやクイズ王級に。「すご~い、そんなこと知りませんでした！」

という驚嘆が混じった言葉がなによりの好物の、にくめないじじいです。

殺し文句は「教えてください！」

うんちくじじいの頭の中には、長年蓄積してきたうんちくが今にもあふれ出そうなほどたくさん詰まっています。隙^{すき}あらばそのうんちくを「ひけらかしたい」と常にウズウズしているのですが、いかにせんクドいため、社内はおろか家族さえも聞く耳を持つともしません。

そんなちょっぴり孤独なうんちくじじいの心にグッと響く言葉は、「教えてください」のひと言。教え^こを乞われることはつまり、知識がある人として認められたこととなりますから、身内までもがそっぽを向き、少々自信をなくしているうんちくじじいにとって、そのひと言は神様からのありがたい御言葉^{みことば}にも匹敵します。

いかにもうんちくじじいが好きそうなテーマを選び、真剣なまなざしで教えを乞ってみましょう。

「教えてください」と聞くなり、うんちくじじいの瞳にあなたは「こんなオレを必要としてくれていてるかわいいヤツ」として映ります。もちろん好感度もグンとアップすること間違いなしです。

このとき、注意したいのは、選択するテーマの選び方です。いくらじじいの得意分野だからといって、自分がまったく興味がないテーマを選んでしまうと聞くのが苦痛、いえ拷問になってしまうからです。

そうでなくともうんちくじじいは、「要するに」とひと言で終わる簡単な内容を、グダグダと回りくどく説明するのが大好きです。うっかり得意分野を選んでしまったら、さあ大変。魂が抜けるまでうんちくを聞かされ続けます。

ですので教えを乞う場合は、自分が少しでも興味があるテーマを選ぶようにしましょう。興味があるのとないのとでは、聞く姿勢にも差が出ますからね。

ストレートに教える技術を身につけてきたら、「まず否定してから教える」という高等テクニックに挑戦してみましょう。

たとえば「僕、ハッキリ言って龍馬なんて今までまったく興味がなくて、いえ、どっちかっていうと嫌いで、なんで皆が騒ぐかわからなかったんですよ。でも先日、Aさんから龍馬の話を教えていただい

て、俄然^{がぜん}興味がわいて本まで買っちゃいました。龍馬のこと、もっと教えてください」という具合。

どうですか？ うんちくじじいが好きなテーマを一度否定することにより、あとの言葉がより一層、引き立ってきますよね。このとき、「Aさんによって人生が変わりました」のひと言でとどめを刺してもかまいません。

ひとりの人間の考え方、人生が、自分のうんちくによって大きく変わってしまう。これはうんちくじじいにとって至上の喜びであり、「オレはアイツの人生に多大な影響を与えた」という極上の優越感を味あわせてあげることができます。

同時に、「オレが変えちゃったんだから、なんとかしてやらなくちゃ」という優越感混じりの責任感も生まれ、なにかと面倒を見てくれるようになります。

そもそも男性は、なにかにつけ「開発」することが好きな生き物。恋愛においても同様で、自分によって恋人が開発され、身体と心が変わっていく様に大きな喜びを見出します。他者が自分の思う通りに変わることで征服欲が満たされ、自分の存在感と価値を再認識できるからです。

恋愛と仕事、ステージは違っても、「影響力のあるオレでいたい」と思う気持ちは一緒。そしてまた、自分に影響を受け、変わってゆく人を「かわいい」と感じることも同じです。こうした心理を巧みに^{たく}利用し、うんちくじじいを上手に手なづけましょう。

うんちくじじいに「そちは愛^ういやつじゃのう」と思わせたらしめたもの。年中、うんちくを聞かされるはめにはなりますが、うんちくじじいの寵愛^{ちようあい}を一身に集めることができます。

「8の共感・2の質問」で、じじいの話を流す

うんちくじじいがお得意のうんちくを語る際、大概はもったいつけて結論をなかなか言わず、話を引っ張り、とことん長引かせようとします。普段、うんちくを聞いてくれる相手がいないので仕方ないとはいえ、お金にもならない話を長々と聞かされる方はたまったものではありませんよね。

そこで覚えておきたいのが「流し」のテクニックです。私はこの技術を実践によって会得しました。

私の相方は自他共に認めるうんちくじじいです。読書魔でオタク気質なことも手伝ってか、「なんでそんなことを知ってるの？」と思ううんちく^{あき}を呆れる、いえ、感心するほど知っています。

話すことも生業^{なりわい}としているおしゃべりな私が彼といると、「へー」「うん」「そうなんだ〜」の3つの言葉をくり返し発しているだけで、私自身の話をすることはほとんどないと聞けば、そのスーパーうんちくじじいっぷりをわかっていただけなのではないでしょうか。

もし自分の話をしたとしても、すぐに彼の話に置き換えられてしまうため(このあたりは、のちに語る「オレオレじじい」の要素もあります)、「ま、いっか」となかばあきらめてしまうせいか、年々うんちくじじいっぷりに拍車がかかってきたように思えます。

しかし、いくら愛をもってしても、一方的にうんちくを聞かされ続けるのは正直ツライものがあります。そこで自然と身に着いたのが、「8の共感・2の質問」による、うんちくを流すテクニックです。

これを体得したことで、ストレスを感じることなく、うんちくを楽しく聞くことができ、かつ相手に気持ちよく語ってもらえるようになりました。その秘訣^{ひけつ}をご披露いたしましょう。

うんちくじじいは基本的に「うん、うん」と共感してもらいたがっています。しかし、相手も決してバカではありません。あまりにも共感されればなしでは、「コイツ、本当にオレの話を聞いているのかな？」^{いちまつ}と一抹の不安を抱きます。

また、共感する際、「わかります」を多用する人がいるのですが、気の置けない友人ならともかく、うんちくじじいに対して使うのはあまりおすすめしません。特に、つきあいの浅いじじいですと、共感どころか、「オレのことをよく知らないクセに、なにをわかってるんだよ」と反対に怒りを買うこともあるからです。

そこで必要となるのは「質問」です。うんちくを聞いているなかで、「これぞポイント」と思う箇所があったら、「それってどういうことかもっと詳しく教えていただけますか？」と話の合間に質問することで、相手に対し「あなたの話を聞いていますよ」というシグナルを送ることができます。

割合は、共感を8割としたら質問は2割程度（じじいによって微調整してくださいね）。ただし、質問があまりに多すぎると、何度も話の腰を折ってしまい、機嫌を損ねてしまうだけでなく、話が永遠に終わらないので、ほどほどにとどめておくのが賢明です。

質問ポイントのを見つけ方ですが、そう難しくありません。人は興味がある話題になると自然と声が大きくなったり、顔が紅潮^{こうちよく}したりします。また、会話のなかでくり返し出る話題があったら、それも外せないポイントです。

「流し」といっても、完全に流してしまってお話になりません。相手に興味を持ち、キチンと観察することもお忘れなく。

質問に「私」という主語をつける

質問の仕方にも、ちょっとしたコツがあります。

ラジオの番組で8年間、気難しいとされる競艇選手のインタビューを担当していたナレーターの景山聖子さんは、「質問の際、『なぜ？』を単独で使うのは厳禁」と言います。

それは、相手が答えたことに対して「なぜ？」と矢継ぎ早に聞いてしまうと、追い詰めてしまうだけでなく、答えを探すことで頭がいっぱいになり、話す気力がなくなってしまうからです。

もちろん、そうした物言いが好きなじじいもいますが、基本的にうんちくじじいは詰問口調をあまり好みません。景山さんによると、「質問を投げかける際は、『それって私はこう思うんですけど、間違っていますか？』『私はこう感じたんですが、本当のところはどうなんでしょう？』という具合に、自分を主とした形で質問してあげると、安堵して気持ちよく話してくれる」のだそう。

たしかに、「私」という主語をつけるとやわらかな印象になって、緊張感も溶け、「この人にはもっと話したい」という気になってきますよね。

また、共感と質問に加え、気持ちよくうんちくを語ってもらうには、「話を要約する」ことも必要不可欠。うんちくがひと通り終わったあと、うんちくじじいの話を「それってこういうことだと私は理解していますが合っていますか？」と要約してあげると、「人の話を聞いたうえで自分なりに消化できる賢い部下」と思われ、さらには「オレの話をキチンと理解してくれたんだな」と感心してもらえます。

このとき、間違っても結論だけをズバッとひと言で言い切ってははいけません。うんちくじじい自身も心のどこかで話が長いことを気にしているため、簡潔に要約されすぎてしまうと、「オレをバカにしてるのか？」と誤解してしまうことがあるからです。

要約する際は、必ず「私」という主語を入れ、疑問形で投げかけ、最終判断を下す役目をうんちくじじいに託すよう心がけてください。

これで、「上司を立てる、気のきいた部下」のイメージはついたも同然です。

「知らないフリ」で優越感を味あわせてあげる

うんちくじじいは人にうんちくを語る際、相手が無知であることを前提に話します。特に、自分が得意分野とする内容については、「フッフ、これを聞いて驚くなよ」と心の中でほくそ笑んだりしているものです。

しかしごくたまに、こちらも知っている知識だったりすることがあります。そんなとき、喉元まで「そんなこと知ってますよ」という言葉が出てくると思いますが、思い切り飲みこんでください。

うんちくじじいにとって、うんちくは印籠いんろう同然。ドラマ『水戸黄門』では印籠を出すのは格さんのお仕事ですが、うんちくじじいは自分で出さないと気が済みません。たとえ知っている内容だとしても、「え～、知りませんでした～」とちょっとおおげさに驚いてあげましょう。そう、「知らないフリ」をするのです。

実はこの方法、私が女性週刊誌の記者時代によく使っていました。

私が連載を担当していた某大物俳優は、まさに絵に描いたようなうんちくじじいで、四六時中うんちくを語ってくれました。頭脳明晰めいせきな方でしたので、その9割近くは知らないうんちくでしたが、ごく稀まれに私が知っているうんちくもありました。

しかしどんなときでも「知ってます」という言葉は言わず、常に初めて聞くような態度で彼のうんちくを聞いていました。「プライドを傷つけない」という気持ちが一番でしたが、「自分が知っている知識だとしても、もしかしたらまだ知らないこともあるかもしれない」と思っていたから素直に聞けたのでしょう。

自分に役立つ知識や情報を得ようとする貪欲どんよくさをもってすれば、「知らないフリ」は苦痛どころか楽しみに変わるのだと、某大物俳優によって教えていただいたような気がします。

「知らないフリ」というと、バカにしているようで非常に聞こえが悪いかもしれませんね。しかしこれは、コミュニケーションを円滑えんかつにするにあたり、必要なことでもあるのです。

「それ知ってます」と言ってしまうと会話しゃだんが遮断され、そこから先の会話のキャッチボールがしにくくなってしまいます。もし私がそう言われたら、「思いやりに欠けるヤツだな」と思い切り不機嫌な顔をしてしまうでしょう。

少し話はそれるかもしれませんが、高齢者は何度も同じ話をする事が多々あります。長年社会と断絶された状況に置かれた方はそれが顕著で、同じ話を定期的に、さも初めて聞かせるかのように話したりします。

私もさまざまなシーンで体験していますが、決して「その話、聞いたことがあります」と言わないようにしています。言われた本人も嫌な気分がするでしょうし、会話がストップしてしまえば、その人を深く理解することができませんからね。

高齢者の場合は話を度々遮断されてしまうと自信がなくなってしまう、引きこもってしまうこともあるようです。人によっては、それがきっかけで痴呆^{ちほう}の症状が出たりすることもあるというのですから、軽視はできません。

さすがにうんちくじじいは引きこもったりすることはないにしても、心ないひと言によってプライドが傷つくのは同じこと。うんちくを聞くのはホンの一瞬です。慈悲の心と優しさをもって、耳を傾けてあげることが大切です。

「知らないフリ」で自爆

しかし、「知らないフリ」にも限界があります。

こちらとて生身の人間ですから、張り子の赤べこのようにいつまでも首を振っているわけにはいきません。時間がなく、話を先に進めたいときは「その話なら耳にタコができるくらい聞いてんだよ」と心の中に住むもうひとりの自分がささやくと思いますが、それを口にしたら最後。まずは笑って、ジッとガマンです。

では、同じうんちくを何度も聞かされたときの対処はどうしたらよいのでしょうか？多摩大学教授の樋口裕一氏は、『自慢がうまい人ほど成功する』のなかで、こんなふうに語っています。

「あ、その話は私たちはすでに何度かお聞きしましたので、よく存じているんですが、とてもためになる話でしたので、ぜひ、もう一度お聞かせください。新人はまだ聞いたことがありませんので、勉強になると思います」と言えばいい。

あるいは、話が終わったあと、「私たちはこのお話を何度も聞いてきましたが、何度聞いてもためになります」と言えばいい。そのように言うと、さすがに話すほうも、同じ自慢話をしてきたことに気づくだろう。

これは同じ自慢話をする上司への対処法ですが、うんちくじじいにも十分に応用できるテクニックですよね。プライドを傷つけることなく、同じ話を聞いていることを明確に上司に伝えたうえで褒める。経験値がないとなかなかできないテクニックですが、覚えておくといざというときに便利です。

そうそう、うんちくじじいが喜ぶからといって、なんでもかんでも「知らないフリ」をすればいいというものではありません。明らかに自分のほうが長けていると思う分野においては逆効果。私の場合ですと日本酒や焼酎がそれに当たるのですが、かつて「知らないフリ」をして痛い目に合ったことがあります。

自称酒通のうんちくじじいが酒席で日本酒のうんちくを話してくれたのですが、あまりに気分がよさそうだったので、私は自分がきき酒師の資格を持っていることを言えなくなってしまったのです。

「ふん、ふん」といかにも興味深そうに知らないフリをしていたところ、たまたま雑誌で私の顔を見たスタッフの方が、「きき酒師の葉石かおりさんですよ？」とわざわざ席に挨拶に来てくれました。

その瞬間、場は凍りつき、うんちくじじいは「釈迦に説法だったな」と吐き捨てるように言いました。

その後は針のむしろ。話が弾むことはなく、そのじじいからの連絡も途絶えてしまいました……。

若気の至りとはいえ、テクニックに走り、嫌な思いをさせてしまったものです。「知らないフリ」のさじ加減は慎重になさってくださいね。

「甘え」というエッセンスを随所で使おう

これはうんちくじじい以外にも言えることですが、世のじじいの多くは、やたらと先輩風を吹かした
がります。その行動の裏には、「オレを構ってほしい」という切なる思いが秘められているのです。

え？ うっとうしいですか？

そう思うのは、まだまだ修業が足りていないという証拠。いい年して「構ってほしい」なんてかわい
いじゃないですか。こういうときは、構ってあげつつ、「オレがコイツの面倒を見てやってる」と思わ
せたもの勝ちなのです。

じじいは基本的に面倒見がいいので、自分になついているとわかるやいなや、なにかと世話を焼いて
くれるようになります。

そこで必要となるのが、「甘え上手」の技術。

「甘え」という媚びることを想像し、拒否反応を示す方がいますが、媚びと甘えは別物です。媚び
は自分を殺して相手の機嫌をとるために媚びへつらうことであり、甘えは自分をきちんと持ったうえで
相手の知恵や力を借りること。「甘え」は決して悪いものではないのです。

しかし、相手はあくまでも上司ですから、ただ甘えればいいというものではありません。職場で好まれる甘えと、敬遠される甘えがあることをまず覚えておきましょう。

ここでは「甘え」を3タイプに分類してみました。

①〈無能型〉 「お前、何も考えてないな」的甘え

社会人として身につけておかななくてはならない一般常識や、小学生でもわかりそうなく簡単な漢字の意味など、明らかに自分で判断できそうなことをやたらと聞くのは、「甘え」ではなく、ただの「迷惑」です。

本人は甘えているつもりで聞いていても、こうしたことが何度もくり返されると、社会人としての資質を問われるばかりか、オツムを疑われるので注意しましょう。

②〈自爆型〉 「もうカンベンしてくれよ」的甘え

これは職場においてもっとも嫌がられる「甘え」です。できるところを見せようとするあまり、頼まれた仕事をなんでもかんでも受けてしまい、期日ギリギリになって「やっぱりできません……」というものの。

こういう「甘え」は、「だったらもっと早く言えよ！」と怒鳴られるのが関の山。なによりも周囲に迷惑ですし、「自分のキャパもわからないダメなヤツ」と烙印を押されてしまうので、できないと思ったことは最初の段階で断る勇気を持ちましょう。

③〈相談型〉 「なかなかデキるヤツじゃん」的甘え

自分でも十中八九結論が決まっているけど、やっぱり経験豊かな上司の助言が欲しい。そんなときこそ、相談という形の「甘え」を大いに使いましょう。

神妙な顔をして「あのAさん、仕事のことでご相談があるんですけど……」とか、「僕、自分の判断が本当にいいのか悩んでいまして、経験豊富なAさんからアドバイスをいただきたいんですが……」などと言われると、じじいはこおど小躍りしたくなるほど嬉しくてたまりません

相談を持ちかけられるということは、頼りにされていること。部下から頼りにされて、嫌な気分になる上司はまずいません。

答えを問う場合ですが、「僕をはじめ同僚や部下もこれが最良の答えだと思っているんですが、Aさんはどう思われますか？」という具合に、「自分も周囲も同意見」であることをさりげなく主張しておきましょう。

大多数の賛成意見が得られていると、反対意見はなかなか言えるものではありません。相談したのはいいけど、うっかり反対意見でも返ってきたら大変ですから、事前の地固めをしっかりとしておくことをおすすめします。

と、今でこそこんなエラそうなことを言っている私ですが、かつては極度の甘えベタでした。

上司に甘えている人を見ると、「けっ、負け犬が尻尾を振りやがって」と毒を吐いていたものです。

上司に対する尊敬の念がゼロに近かったこともあり（これもまた最低ですね）、「バカなヤツに媚びるなんてまっぴら」と意固地になっていました。上司からすればプライドばかりが高く、言うことを聞かない扱いにくい部下だったに違いありません。

上司とて人間ですから、そんな部下より自分になつく部下をかわいがるに決まっています。

当然のごとく、おいしい仕事はすべて甘え上手な人に流れていきました。そんな状態になってもなお、私は上司に甘えることができませんでした。意地ばかりが先だっしまい、一度抜いてしまった刀を戻す鞘さやを見失ってしまったのです。

これはもう「幼い」のひとつ言ですね。結局、私は上司との衝突が原因でドロップアウトしてしまいましたが、それによって「甘え」の必然性を強く認識しました。

甘えることは、相手に対し、「あなたのことを心から信用していますよ」という証でもあります。

犬で言えば「キューン」と甘えた声で鳴き、コロんとひっくり返ってお腹を見せた状態を指します。いつまでたっても尻尾を隠し、歯と敵意を丸出しにしている犬より、自分にすり寄ってくる犬のほうがかわいいでしょう？ 人間もまた同じことです。

職場において、輪を乱す意地っ張りな部下は迷惑千万。頑かたくにならばなるほど損をするばかりです。甘えるといっても魂を売り渡すワケではないのですから、心と頭をホンの少しだけやわらかくして、「甘え」を上手に活用しましょう。

うんちくじじいは、実は「情報の宝庫」

さて、うんちくじじいに話を戻すと、おもしろくもないうんちくを長々と聞かされたり、ときに知っていることなのに知らないフリをしなくちゃならない彼らは、扱い方が少々面倒です。

特に、社会経験の浅い若い世代は、「できることならつきあいたくない」と思う人がほとんどなのではないでしょうか？

たしかにうんちくじじいが語る多くはどうでもいいことで、仕事に役立つことはそうそうありません。しかし、まったく役に立たないかといったら、それは大きな間違いです。

本、テレビ、ウェブなど、あらゆるメディアから収集したネタを持つうんちくじじいは、歩く検索サイトのようなもの。うんちくじじいから仕入れたうんちくは自分自身もネタとして使えるのですから、利用しない手はありません。

特に、コミュニケーション能力、会話力に自信がない人ほど、いくつかのうんちくを持ちネタとしてキープしておく、酒席などにおいて、話のきっかけをつかむことができます。特につきあいの浅い人には、ちょっとしたうんちくが距離を近づける突破口になったりするものです。

うんちくはマニアックで小難しいものではなく、誰もが「へ～」と感心できる程度のごくごく軽いものにしてください。たとえば、「ドラえもんは床から3ミリ浮いて歩いている」とか、「ニューハーフという言葉は初めに使ったのは桑田佳祐」とか、あとは「日本で初めて新婚旅行に行ったのは坂本龍馬」なんていう歴史的人物のうんちくも食いつきが良さそう。

これらのネタはうんちくじじいの相方から得たものですが、酒席がイマイチ盛り上がらないときなどに「ねえ、ねえ知ってる？」と切り出すと効果的です。大概の人は「へ～」と感心し、そこから一気に会話が弾みます。

話が盛り上がったなと思ったら、うんちくはそこまで。調子に乗って、うんちくをどんどん披露してしまふと、自分もうんちくじじいと化してしまいますので、くれぐれも注意しましょう。

そもそも、うんちくは迷惑なものどころか、本来は耳を傾けるべきものだったんですよね。『広辞苑』を引くと「物を十分にたくわえる。知識を深く積み貯えてあること。また、その知識」とあります。

いつの頃からか雑学とゴッチャになり、オタク的な要素が加わったことで、「うんちくは聞かされてうっとうしいもの」に変化してしまったように思います。

念仏のように一方的にうんちくを聞かされるのはたしかにしんどいですが、エッセンス的に使えば立派なコミュニケーションツールにもなります。特に、昨今の若い世代には、このうんちくによるコミュニケーションを強くおすすめしたいですね。

彼らはパソコンやケータイでのコミュニケーションは得意でも、リアルな会話が苦手な人がほとんど。そうした人に共通しているのは「会話のきっかけをつかむのがヘタ」だということ。ちょっとしたうんちくさえ知っていれば、話のきっかけなんていくらでもつかめますし、スムーズな会話も夢ではありません。

そう考えると、うざったいと思っていたうんちくじじいも、「うんちくオーソリティ」として尊敬の念を抱けるようになってきませんか？

物は考えよう、うんちくじじいは使いようなのです。